

「Q & A 腹腔鏡下胆嚢摘出術 こんな時どうする？」

滋賀医科大学教授・第1外科 小玉 正智 監修
 滋賀医科大学・第1外科 来見 良誠 著

天理よろづ相談所病院・腹部一般外科

藤 川 貴 久

本書の頁をめくってみて最初に思ったのは、“読みやすい”ということであった。本書が完成する以前に、偶然にも本書の原稿に目を通す機会を得たが、そのときに想像したイメージより、更に親しみやすく、利用しやすいとの印象を受けた。質疑応答形式にしたことに加え、サイズがA5判とコンパクトなこと、図を豊富に用いながら1つのQ&Aを見開き2頁に収めて見やすくしていることなどが、全体としてよくみせている理由かもしれない。しかし、内容はというと、よくあるマニュアル本と違い、もっと実践に即したプラクティカルな内容を詳しくかつ丁寧に述べている。随所に“キラリ”と光るちょっとした手技や道具の工夫がちりばめられている。

本書はいわゆる手術書ではない。よって手術の手順や実際に使う道具を知らなければ、本書を読んでも全

然イメージがわからず、したがっておもしろくないかもしれない。しかし、実際に腹腔鏡下胆嚢摘出の手術を1度でも執刀した経験のある医師には、特に後半の手技編や器械編の内容は興味深いものとなるであろう。例えば、胆嚢管のclippingを行うときに周囲結合組織などでclipをかけられる幅が狭いときなどに用いているSemi-closed clipping methodはちょっとしたことであるが、なかなか有用な方法と言える。

腹腔鏡下胆嚢摘出術は1989年に最初の報告がされて以後、その簡便性、手術侵襲の少なさ、美容上の利点などから急速に普及し、現在では標準術式の1つとして定着しつつある。一方で、これまでの術式に比べて術野へのアプローチへの制限が多く、予期せぬ術中の合併症を来すこともあり、より安全でかつ正確な手技や、それを行うための道具の工夫

を行っていく必要がある。ある程度確立されつつある術式とは言え、従来の開腹術では考えつかない工夫の余地がそこに残されているはずである。本書にもいくつかのそうした工夫があるように、更に各々が独自の工夫を凝らしていく必要がある。そうした種々の手技を錬磨し、独自で工夫していくための一助としても本書は役にたつものだと思う。

最後に、著者の来見良誠先生が本書のまえがきで書かれているように、“自分自身の責任で手術を施行する立場に立つ機会に遭遇したとき、本書の存在意義が明らかになる”のではないかと思う。是非一読をお薦めする書籍である。

● A5 頁176 図45 1996 定価
 3,914円(税込) 〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)